

小松整形外科医院開院25周年に寄せて

当院は平成1年3月20日勝田市（現ひたちなか市）市毛にて開院しました。平成26年3月20日でちょうど25周年になります。

医師1人、看護師6人、レントゲン技師1人、事務員2人のこぢんまりとした整形外科専門のクリニックとして始めました。現在開院当時のメンバーは伊藤看護師と私の2人だけになってしまいました。

私は日立市の出身ですが、大学が青森県弘前市にある弘前大学に入学し、卒業後も青森県の病院に勤務していました。昭和63年に事情で茨城県に帰ることになり、縁有って勝田にて開院することになりました。

開院当時は、茨城県の医療機関に勤めたこともなく、特に宣伝もしなかったせいかな本当に暇でした。ある時など採用した看護師が「こんな暇なところに勤めたくない」と一日で辞めてしまいました。しばらくして、再び就職を希望してきましたが、もちろん丁重にお断りしました。今では考えられませんがそれほど暇でした。

スポーツ障害を専門にしていたのですが、当時はまだ一般的ではありませんでした。スキークラブに入れてもらい、バレーボールやサッカーなどの関係者と知り合い、徐々に地域の人に支えられて患者さんも増えてきました。

25年の間にはスタッフも大勢交替しましたが、人とのつながりが将来を決める大きな要素であることに気づかされました。

茨城県立こども病院に弘前大学の後輩の山下先生が勤務していたことは実に幸運でした。私が麻酔科の研修を受けていたときに、彼は大学の麻酔科に在籍して旧知の間でした。手術をはじめ多くのきびしい局面で助けられました。現在当院に勤務し年間400例近くの全身麻酔手術を担当してもらっています。

開院当時、日製水戸総合病院には整形外科が有りませんでした。国立水戸病院の整形外科科長が以前からの知り合いだった事から、難しい患者は国立水戸病院にお願いしていました。しかし、平成2年に水戸総合病院に整形外科が開設され、中島宏医師が赴任してきました。歓迎会で中島医師に「勝田の患者は勝田で完結しよう」と話し合ったことを今更のように思い出します。

市毛に開院して10年経過し、現在の津田に新築移転しました。整形外科の患者さんは歩行が不自由な人が多いのですが、市毛の時はエレベーターがなく大変な負担をかけておりました。バリアフリーの建物にしたので患者さんの負担は少なくなりました。

平成12年に中島医師を副院長に迎え、同時に法人化し「薫光会 小松整形外科医院」となりました。外来患者が急速に増加し、スタッフがパニックに陥りました。手術も増えてきましたが、麻酔科医が常勤でなかったため外来終了後に行わざるを得ず、患者さんはもちろんのことスタッフにも大分苦勞をかけました。山下医師が平成20年から常勤となり、現在はそのようなことは無くなりましたのでご安心ください。

平成16年星医師が赴任してくれました。国立弘前病院勤務時代に一緒に膝関節疾患とともに学んだ仲間です。ちょうど県医師会の仕事が忙しくなった時で膝関節の手術は全て任せて現在に至っております。

平成20年に小松史医師が赴任し足の病気を担当するようになり、現在5名の医師で診療をしています。

平成18年増築し、MRIを導入したことは画期的な事でした。それまでは勝田病院にMRI検査をお願いしており、患者さんには大変煩わしかったと思います。また、同時に通所リハビリテーション施設「すだち」を開設しました。市毛時代に受診してきてくれた患者さんが高齢者になり、通院できないという声を聞き、支えてくれた地域のみなさまにいくらかでも恩返しが出来ればと思っています。

医院自体の体制としては、平成14年に師長として迎えた三浦百合子看護師長に負うことが大きくありました。看護体制、教育プログラム、委員会組織など組織としての体制が整ってなかった当院を曲がりなりにもきちんと組織化してくれました。

現在、パート職を含めて50人を越える体制になりました。一人一人が常に自分の資質の向上に努めてくれていることに感謝しています。

これからの医療は、「病院で治す医療から地域で支え癒す医療」へと在宅医療が中心になっていきます。当院は急性期疾患に対応する有床診療所として続けていきますが、通院困難な患者さんのために訪問リハビリテーションなども行いたいと考えています。

これからも患者さんの利益を最優先し最良の医療を提供するという理念のもとに、地域の人々に支持される医療機関として努力していきます。ご支援お願い致します。

理事長 小松 満

職 員 よ り 一 言



祝！！開院25周年。

入職当時は6名の看護師の中で、1番若かったのに気が付けば・・・。

25年を振り返ってみると、沢山の思い出がありすぎて、本当に「あっという間」だったなと感じています。

開院直後は外来のみで、全員が外来勤務でしたが、受診する患者さんが少なく、業務の半分は衛生材料（注射用の消毒綿や綿球等）を作ること。そうすると、つい集まって話に花が咲き、よく理事長から「うるさいぞ！」と注意されたものでした。現在の外来からは想像つきませんよね。

病棟稼働後は、手術も少しずつ増えてきて、手術室業務を覚えるまでは、怒られながらで緊張の連続。あの頃の理事長はホントにこわかった！！

でも、職員旅行や忘年会に納涼会等の楽しい事も沢山あり、それは現在も同じですね。


私事では18年前に左膝の手術をして、仕事を2ヶ月位休んだことがありました。当時の建物にはエレベーターがなく、松葉杖を使う患者さんの大変さを、身をもって実感したのを覚えています。手術後は不安なく何でも出来るので、趣味（スキー）を楽しんでいます。

人間関係や職場環境にも恵まれた25年。

この先も、小松整形の職員として頑張っていきたいと思っています。

看護師主任 伊藤 範子





私は医学部を卒業後筑波大学付属病院などでの6年間の研修を終了し、平成2年4月に日製水戸病院に就職しました。勝田は初めての土地で、芋畑しかない田舎（失礼）だろーと思っていましたが、長崎屋はある伊勢甚はある、亀宗・マルカワもあり当時のつくばよりずっと都会でした。病院は築50年以上経過しており決して綺麗とは言えませんでした。景気もまだ悪化していない時代でしたので、どこかのんびりとした大企業の病院で週休2日というのも初めてで、ワクワクしていました。実際働いてみると、私が赴任するまでは整形外科医がいなかったのが予想以上に患者さんが多く、一人で孤軍奮闘という状態でした。医者仲間の常識で、研修を終了し就職した時は同級生やお世話になった先輩方に挨拶状を送るのが慣わしです。私も、同級生に日立制作所水戸総合病院整形外科医長に就任しましたと挨拶状を送った訳です。筑波大学医学部学生の実習先に日立製作所日立総合病院がなっていますので、日立総合病院が大学病院並に大きい病院だとみんな知っていました。水戸総合病院（勝田にあるのに水戸病院というのがややこしくて勘違いの元）と言うくらいだから、県庁所在地の水戸にあるだろう日立制作所の病院だから、日立総合病院よりずっと立派なんだろうとみんな（私も含めて）考えていたらしく、そんな立派な病院の医長に就職されておめでとうございますと返事を何人かからもらった時には面くらいました。きっと部下が10人以上いるイメージなんでしょうね。一人も部下はいません、医長兼医員で一人社長みたいなものですから、ちっとも立派な立場ではございません。返事を出して説明するのも面倒なので、そのままにしました。

私と小松理事長との出会いは、私が勝田に来て勝田市内の整形外科医が6人になったので、勝田整形外科医会なるものを立ち上げて集まろうとの小松理事長の声掛けで、6人が集まった時です。私より1年早く弘前からこちらに帰って来て勝田市内に開業していた小松先生に、どこかアルバイトに行っているのかと聞かれ、来たばかりでどこにも行っていませんと答えたら手伝いに来いと言われました。小松先生も一人で診療しているので外来が終わってから夜に手術をしていたので、こちらも自分の仕事が終わってからなので問題ありません。他大学出身の先生の手術が見れるとあって興味津々なので、すぐに引き受けました。東北地方で膝の神様と言われていた小松先生の手術をととても楽しみにしていましたが、実際行ってみると当時の小松理事長はまだ若く血気盛んでしかも超短気で、手術中に言った道具がすぐ出てこないと大声で怒鳴りつけるし、最後は手術器具を投げつける始末で、これはやばい所に来てしまったと気づき早く逃げ出そうと考えていました。2回目に行ったら、今日はお前やってみろと言われて大変緊張しながら手術をやることになり、無事やり遂げましたら何だか認められたらしく、以来小松先生の監督下に手術をすることになり、そのまま継続してお手伝いすることになりました。つき合ってみると、親分肌の正義感の強い酒好きの人情親父で、大変面白い人物だと分かり、出身大学の違いも全く気にならず兄貴分のように慕ってのおつき合いとなりました。

何事もなく10年間の経過しましたが、この場では詳細は申し上げにくい内容ですが水戸病院と私の間で揉め事が発生し（私は全く悪くありません、大人げないと教授からはひどく怒られました）、急遽水戸病院に辞表を出し退職することになり、小松理事長に水戸病院を辞めて来たから雇ってくれと飛び込みまして、平成12年4月からここ小松整形外科で働

くことになりました。市毛にあった時から順調に患者さんが増え、平成11年に手狭になった市毛から現在の津田に移転し、更にたくさんの患者さんに来て頂けるようになりました。厳しい社会情勢・医療情勢ではありますが、当院は大変人材に恵まれ小松理事長の愛弟子である膝専門の星先生が赴任してくれると、次には不足が叫ばれる麻酔医科の山下先生が来てくれ、足専門の小松史先生も来てくれ、後輩の手が専門の市村先生・肩専門の宮本先生・膝専門の渡辺先生も手伝いに来てくれて、いつのまにやら頸から足までほとんどの整形外科疾患を診療可能な充実した布陣となりました。これも後輩の面倒見の良い小松理事長の人徳でしょう。

更におめでたいことに、昨年小松理事長が茨城県医師会長に就任し、現在茨城県の医療情勢の向上のために精力的に活動しております。当院としても大変名誉であるとともに、茨城県内の医療状況は医師不足・医師偏在・救急体制の整備などいくつもの大きな問題を抱えておりますので、小松理事長の手腕に期待し応援したいと考えています。

これからも地域の皆様のお役に立てるよう、職員一同いっそう努力してまいります所存です。今後とも、小松整形外科をよろしく願い申し上げます。

院長 中島 宏

職 員 よ り 一 言



私は、開院して3年が過ぎて忙しくなって来た頃、誰でもいいからと採用されました。

整形外科は初体験で、無我夢中で仕事を覚えながら子育てをしているうちにアッという間にもうすぐ22年を迎えます。

市毛にいた頃、先生は理事長1人で、土曜の午後外来終了後に手術をしていました。遅くなることはしょっちゅうだった様な気がします。

夜勤と日曜勤務は、1人で洗濯、配・下膳、茶碗洗い・・・何でもやっていた気がします。

でも、理事長の「お疲れ様。ありがとう」の言葉で疲れもふっ飛んで頑張れたと思います。

平成11年に津田に越して、先生も徐々に増え、すだちも設立され、スタッフも増え、こんな風になるとは予想していませんでした。

一番楽しかった思い出は、理事長が企画してくださった「ねぶた祭り」社員旅行です。祭りの偉大さと、ハネで踊っている時の爆発感は最高です。本場のねぶたでしか味わえない物です。もう1度行きたいナ～！

若いスタッフにサポートされながら30年目指して頑張りたいと思います。これからもよろしく願いします。



病棟主任看護師 山縣 愛恵



平成元年に小松満先生（現理事長）が国立弘前病院から故郷の茨城に戻られ、小松整形外科医院を開設されました。当時のことは詳しくは存じ上げませんが、福岡で膝関節外科の研修中であつた私も開院パーティーに参加させていただき記憶があります。その会には小松満先生と私の弘前大学整形外科学教室時代の教授であり、当時弘前大学学長でありました故東野修治先生がご出席になられておりましたが、その事が凄いいことだったと気づくには、その後長い年月を要しました。

開院後、小松満先生の地道な努力によって地域での信頼を築き上げ、平成12年に中島宏先生（現院長）が赴任されてからは益々患者数も増え、発展してきました。私が当院に赴任したのは、平成16年4月で、今年（平成26年）の3月で10年の月日が流れました。小松満先生は弘前大学整形外科学教室の11年先輩であり、膝関節、特に関節鏡手術のパイオニアであります。また私に関節鏡のイロハから教えてくださった“膝の師匠”でもあり、私自身は弘前時代から数えると31年間お世話になっていることになります。

現在の当院の状況は、平成20年に小松史先生、麻酔科の山下正夫先生が常勤になられてから、整形外科医4人、麻酔科医1人となり、他の整形外科と比べても小回りが利き、患者に優しい麻酔が確立され、整形外科手術を行う環境には非常に恵まれていると思います。ただ昨年从小松満先生が茨城県医師会長の職に就かれ、県全体の医療を考えるお立場になり通常の診療の継続は難しい状況になりました。常勤医師の高齢化もあり、更に若い整形外科医の必要性を真剣に考える時になってきているのではと思います。

今後はこれまで築いてきた小松整形外科医院への信頼を基に、小松満先生が言われる“小松ブランド”の名に恥じないような診療、看護、検査、手術、リハビリテーションの充実に努力し、患者さんの利益を追求していきたいと考えます。

副院長 星 忠行

職員より一言



平成元年 小松整形外科、市毛に開院。

平成2年に、当時入院患者だった伊藤さん（当院職員）のお見舞いに行った時に理事長に捕まり（？）入職。出産、病気、介護等の為パートになったり休職したりといろいろワガママしましたが、クビにもされず（感謝しております！！）現在まで勤務。

入職した当時は、私を入れて看護師7人。外来患者数1日30~40人（多分・・・(^_^;)）入院患者数は満床で10人。だいたい7~8人で1人夜勤。前十字靭帯再建術が多く、しかも手術は外来（18時まで）が終了してから開始。午前様帰宅を何回も……。今では体力的に絶対無理！（もう・・・やりませんよね。先生・・・）

理事長の診察は、捲し立てる様に大きな声で話すので恐いとおっしゃる患者さんを何回か耳にしたことがあります。実は優しいんです。市毛にあった建物はエレベーターがなく（整形外科なのに・・・）、歩行困難な患者さんは車イスのまま職員が2Fの病棟まで運んでいました。そこで考えた先生、階段にレールを付け電動のイスを設置。何年も通院されていた患者さん「最近来ないね。どうしたんだ？」と心配。高齢になり通院することが大変になったと知ると昼休みの時間に往診。



私が入職した年は、H1 1. 2月、小松整形外科医院が現在の津田に移転し、H1 2. 4月、中島先生が当院に就職され、小松整形外科医院がさらに飛躍しようとしている年でした。患者数の増加とスタッフ不足により‘猫の手も借りたい’状態だったようで、私の入職はとても喜ばれ、スタッフからあたたかく迎えられた気がします。

現在とは違い、当時は外来終了後に手術を行っていたので、昼は外来、夜は手術とフル回転で働いていましたが... 今、思うと、若かったんですね(笑)。

患者さんと関わることや、仕事を覚えていくことが楽しくて、さほど、疲労を感じることもなく、毎日が過ぎていました。

平成16年に星先生、平成20年に山下先生・小松 史先生が就職され、手術が1週間に4日となり、外来診療も充実して、現在もフル回転ではありますが楽しく働かせていただいています。

途中、出産のためにお休みをいただき復帰しました。育児休暇や突然の子供の病気などで、スタッフの皆さんにはご迷惑をおかけしました。育児と仕事の両立に悩むこともありましたが当院のスタッフは育児経験者ばかりで理解があり、優しく励まされ、今日まで仕事を続けることが出来ました。また、仕事の面では、外来主任、看護師長と役割が変わりましたが、先生方やスタッフの皆さんに支えられて、今の私があるのだと感じています。

仕事をしていて幸せに思うことは、先生方やスタッフがとても明るく、優しく、仲が良いことです。患者さんからも、「先生や看護師さんが優しいね。なかなか、こんなところないよ。」と声をかけていただきます。職場の環境や人間関係が良いからこそ、医療・看護の質も向上するのだと思います。これまでの経験を生かし、さらに働きやすい職場環境作りに努めてまいります。

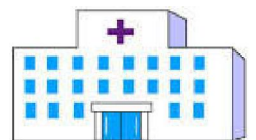
ここ数年は、ひたちなか市近隣の患者さんだけでなく、県内外の患者さんの受診も増えおりますが、今後、さらに小松整形外科医院が地域の皆様に愛される病院となるよう、スタッフ一同、努力してまいります。

看護師長 志賀 衣里子



平成 11 年 津田に開院。

平成 12 年 院長の中島医師をお迎えして手術件数も職員も増えました。



MR I の検査のために他院へ受診していただくのは2度足で大変だよとMR I 室を作り、高齢になっても通える様にと送迎バスのある通所リハビリ“すだち”を開所。この次は何を考えて実現するのでしょうか・・・楽しみです。

そして謎！！市毛にまだ当院があったころ「休憩時間に魚市場の様にみんな寝てるのか？と・・・。(魚市場・・・。いつ、見たんですか・・・まぐろですか・・・) 立ち仕事なので、少し横になると楽なんですと返答した覚えが・・・。

だから??現在の休憩室も畳み敷きです。

(優しい・・・そして、見られてる!?)



外来主任看護師 舟生 久仁子





小松整形外科医院理事長の小松満先生は、私の出身大学である弘前大学の2年先輩であります。私が大学を卒業して、右も左も分からないまま母校の麻酔科に入局しました。その時に、小松先生は整形外科から派遣されて麻酔科にて研修中でありました。先生は、医者 of イロハも分からずに、医局をうろうろしていた我々に気楽に声をかけて下さいました。やって良いこととやってはいけないことをそれとなく指導してくれたものです。小松先生が麻酔の研修を終えて整形外科の医局に戻られたあとも、手術室などで合うと、いつもニコニコと声をかけてくれていました。

時が経って、いろいろな縁から、私は小松整形外科医院で麻酔を担当することになりました。25年前の麻酔と、現在の麻酔を比較してみると、現在の麻酔を受けられる患者さんは本当に幸せだと思います。昔は、手術を受けるとなると、手術の大小に関わらず、前日または前々日から入院していました。また、前の晩から絶食にされて、手術まで飲まず食わずの状態です。手術室に運ばれて来ていました。さらに、手術室に行く前には、麻酔中の有害反射予防のためと称して痛い筋肉注射を受けるのが通常でした。その頃の麻酔の薬は、効くまでにそれなりの時間がかかり、また覚めるにも時間がかかりました。さらに、心臓に対する影響が強かったので、不整脈が出やすく、また血圧の維持が難しいものでした。その頃は、患者さんの体を温めるのに有効な器具がなかったため、手術が終わる頃には体温が低下していて、ますます麻酔からの覚醒に時間がかかりました。病棟では看護師さんが電気毛布で患者さんのベットを暖めてくれてはいたのですが、病室に戻った患者さんはガタガタ震えておりました。

今のように、区域麻酔（神経ブロック）の方法が確立していませんでした。そのため、関節の置換手術などでは麻酔から覚めた後は、患者さんは術後の痛みとの戦いでした。筋肉注射での痛み止めの薬を使っても、効いている時間が短く、また吐き気や気分不快を伴うことが多かったものです。今は、区域麻酔で手術部位の痛みを軽減することが可能となっています。

今後も、麻酔技術の進歩に遅れを取らないように、アンテナを高くしてより安全、快適な麻酔サービスが提供出来るように日々の努力を続けて行きます。



麻酔科部長 山下 正夫

小松整形外科医院が開院して25年が経ちました。ということは私が青森県の弘前市からひたちなか市（25年前は勝田市でした）に引っ越してきて25年ということです。

私にとって開院当初の出来事と云ったら、引っ越しの事しかありません。中学2年生の夏に引っ越して来たのですが、私は「なんで引っ越すのー?」と思いました。でも中学3年だった兄はもっとそう思ったことでしょう。そして中学3年になる春休み、平成元年3月20日に開院しました。開院当初（まだ市毛に病院があった頃）学生だった私は夜になると病院に行って待合室から漫画を持ってきてリハビリ室で読んでいました。時々夜勤の看護婦さん見られていましたが、その看護婦さんと今働いています。若かった頃の〇〇さん・・・思い出せません。

高校3年まで医者になる気がなかったので病院のことにあまり関心がありませんでした。ただ父が夜遅くまで手術をしていた事と、手術の時には手伝いに来ていただいた先生のために用意した出前のお寿司が食べられたのがうれしかった事は覚えています。

医学部に進学し大学5年の時に今の場所に移り、6年前より私も小松整形外科医院で働かせていただいています。今後30周年、40周年、50周年をめざし、これからも地域の皆様に貢献できるようがんばっていきますので、何とぞよろしく願いいたします。

医師 小松 史

開院して25周年を迎え、患者さん並びに関係者の方々に支えて頂いたおかげと心より深く感謝を申し上げます。

私が14年前に入職した時は職員数が今の半分くらいでした。

直後に中島先生も加わり、外来・手術の人数がケタ違いになり当時のスタッフには大変な苦勞を掛けてしまいました。昔は～という話は苦手なため控えさせていただきますが、その当時の忙しい中でも笑顔で仕事していた皆には今でも頭が下がる思いです。

その後スタッフの入れ替わりもあり、今では私より前に入職していたスタッフは4人だけとなってしまいました・・・すでに古株となっています。

今でこそ事務長職に就かせて頂いておりますが、入ったばかりの頃は何もわからず、元事務長をはじめ先生、スタッフはもちろん、出入りしている業者の方々にも様々なことを教わり、また支えられながらここまで成長することができたと思っています。

先生方、元・現職員が、自身の経験・技術を惜しみなく提供し、その積み重ねられたもの25年分の歴史が今の小松整形の医療の形となり患者さんへと提供できているのだと思っています。

今まで小松整形に携わってきた方の働きや思い、周囲の方の支援、患者様からの声などに対し感謝の気持ちで一杯です。

その歴史の重さを感じつつより良い医療を提供できる場を作るため、さらに自分も何かを残せるよう努力していきたいと思えます。

今後とも小松整形に対し厳しい意見と共に、温かく見守って頂けるようお願い致します。

事務長 北澤 仁